

平成 30 年 6 月 22 日現在

機関番号：23901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26380936

研究課題名(和文) 非行少年の被害経験が非行性に及ぼす影響 - いじめ, 虐待, 犯罪被害等の経験に注目して

研究課題名(英文) Influence of victimization experiences among juvenile delinquents on delinquency

研究代表者

堀尾 良弘 (HORIO, Yoshihiro)

愛知県立大学・教育福祉学部・教授

研究者番号：40326129

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：多くの非行少年は生育環境上の負因を抱えている。非行少年に虐待被害者が多いことは先行研究でも指摘されてきた。しかし、これまでは虐待や家庭の問題に限定されてきたため、本研究では家庭での虐待, 学校のいじめ, 地域での犯罪被害について調査した。その結果, 非行少年は一般青年と比較して, 多くの被害経験を体験していたことがこれまでの調査と同様に明らかとなった。特に今回のデータ分析では, 被害経験が初発非行年齢を早め, 後の非行に影響していることを明らかにした。さらに, 虐待経験時の怒りの感情の強さが初発非行年齢に影響していた。今後の矯正処遇では, 被害経験による非行少年の怒りの感情について検討することが重要である。

研究成果の概要(英文)：Many juvenile delinquents grow up in difficult environments. It has often been suggested that many juvenile delinquents are victims of abuse. However, there were restricted to abuse or family's problem. Thus, this study investigated the victimization experiences of juvenile delinquents, including child abuse at home, bullying at school, and crime in the community. It was also found that juvenile delinquents experienced significantly more victimization than non-delinquents. Especially, I examined the influence of childhood victimization on later misconduct and/or delinquency. Moreover, the strength of the anger feeling at the time of abuse experience has influenced the first age of misconduct. It is important to discuss the feeling of anger in reform treatment.

研究分野：社会科学

キーワード：犯罪・非行

## 1. 研究開始当初の背景

近年、少年非行は減少の傾向にあり、少子化による少年人口の減少以上に少年人口比から見ても少年事件発生件数の減少傾向は続いている。しかしながら、世間一般では特定事件から少年犯罪の「凶悪化」の印象が強く、今日においても少年非行への関心は高い。犯罪非行に走る非行少年の解明はますます重要な課題となっている。我が国における過去の少年事件を概観した際に、世間に動揺を与え社会不安を呼び起こした幾つかの凶悪犯罪を見ると、犯人の少年は過去に虐待などの被害体験を受けていたことが精神鑑定や家庭裁判所の審判結果などによって示されることがある。このような被害経験を有している非行少年の実態やその心理特性に注目がされるようになってきたが、個別事例の検討が多く、実証的なデータ・エビデンスによる十分な解明が進んでいるとは言えない。

我が国の犯罪心理学研究を代表する日本犯罪心理学会における事例研究や少年司法・矯正行政における非行少年の実践的事例分析（家庭裁判所調査官による少年調査、少年鑑別所における資質鑑別等）においては、非行少年が自らの生育歴の中で様々な被害体験を得ていることは少なからず示されてきた。このように、非行臨床の実務家の中では多くの具体的事例によって例示され、とりわけ非行性の進んだ非行少年は、その養育環境や資質面においてネガティブな要因を抱えている者が多いことは周知の事実であるとも言えるが、実証的研究は少ない。

また、少年院・少年刑務所の矯正処遇においては、非行少年の更生に向けて、非行少年の被害性に注目しながらも、自らの被害性に逃げ込ませることなく、加害者としての自分に直面させている。そして、再犯させないための処遇プログラムが重視され、法務省では本格的な再犯防止対策が図られるようになった。非行少年の更生に向けた取組みにあたっては、非行少年の被害性から加害性への転化の問題を明らかにする必要がある。

## 2. 研究の目的

非行少年の被害体験に関する研究は虐待研究に代表されるが、虐待は身体的虐待のみならず心理的虐待経験も重要な要素であると考えられる。また虐待のみならず、非行少年自身は犯罪被害やいじめ被害にもさらされた経験があり、これらの被害経験も彼らの生活感覚、非行への指向性などに影響を与えているのではないかと考えられる。

本研究では、非行少年の家庭・学校・地域等の生活環境における様々な被害体験を踏まえた上で、非行少年の心理特性と非行性の関連について明らかにする。すなわち、被害体験が性格、感情、非行性にどのように影響しているのか明らかにする。非行少年の被害経験の影響を明らかにすることによって、被害経験からの回復への手立てを探り、更生へ

の道のりを検討する。

## 3. 研究の方法

本研究は調査研究によって進める。主となる調査研究は非行少年を対象としたものであり、また比較調査として一般の青少年を対象とした調査も行う。

まず調査時期の前半は、非行少年が入所する矯正施設を管轄する法務省、矯正施設との協力関係に基づいて、非行少年に対する調査を実施する。

非行少年に対しては、家庭・学校・地域等の生活環境における様々な被害体験（家庭における身体的虐待、心理的虐待、ネグレクト、学校におけるいじめられ被害、地域生活における犯罪被害等）についての質問紙調査を実施する。また、研究代表者である堀尾（2001）が作成した無気力尺度（「厭世観」、「失敗不安」、「自信なし」の3因子構成、30項目）の調査もあわせて実施し、被害体験と無気力との関係についても注目する。さらに、性格検査（法務省式人格目録MJPI（法務省、1999））等の心理尺度測定も実施して、被害体験と心理特性、非行性との関連について調査する。

次に、比較対照群として、一般の青少年（14歳から19歳）の調査研究を行う。一般の青少年に対しても、家庭・学校・地域等の生活環境における様々な被害体験と心理特性についての調査を行い、非行少年群との比較を行う。

さらに、調査時期の後半には、補充調査を行う。調査データを補充して信頼性の高いデータ検証を行う。分析にあたっては、SPSS（IBM）統計ソフトを利用する。

なお、本研究は非行少年及び一般の青少年を対象とした研究であり、プライバシーの問題には慎重を期する必要がある。インフォームド・コンセントを徹底し、プライバシー保護を保障するよう研究代表者と調査施設とで相互に対応する。

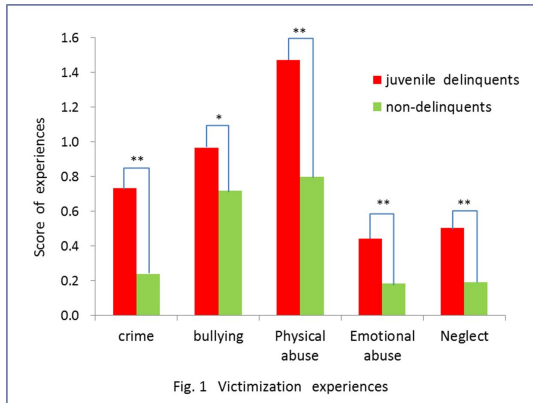
少年調査を実施する際に、「利用目的を明示し、本人の利益を確保する」「学術研究目的にのみ限定してデータを利用する」「個人情報情報を保護する」「回答は任意であり、本人の同意にもとづいて実施する」ことについて、調査用紙に明記するとともに、調査実施時にも説明し徹底する。

また、法務省の矯正施設に適用される個人情報・矯正情報セキュリティ関係の法令・通達を遵守する。少年氏名、居住地など個人を特定する情報が外部には絶対に漏洩しないよう徹底的に管理する。研究上得られた調査データは数量化して統計的に扱い、回答済み質問紙やデータ保管について適切に管理する。研究期間が終了した後は一定期間データを保管し、その後データは廃棄する。

調査研究の実施にあたっては「日本臨床心理士会倫理規定・倫理綱領」「犯罪心理学会倫理綱領」を遵守して研究を行う。

#### 4. 研究成果

調査研究の結果、非行少年における被害経験は一般の青少年よりも有意に多いことが示された。この結果は、これまでの筆者の一連の研究結果と同様の結果を得ることができ、データの信頼性がより一層高まった (Fig.1)。

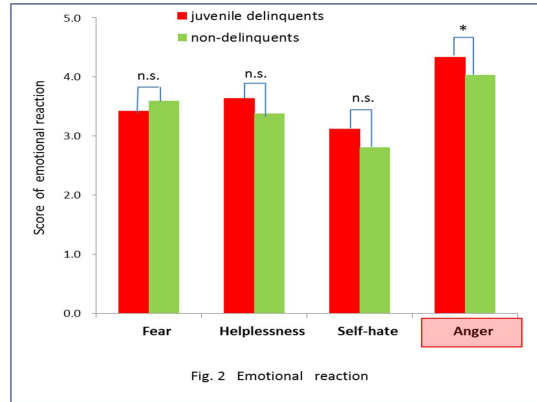


今回の研究では、このデータをさらに詳細に分析した。すると、犯罪被害については、当初は同じ学校・地域の不良な先輩又は同級生から金品の巻き上げ (恐喝, 窃盗), けんか (暴行, 傷害) などの被害を受けていた。被害にあった後に、不良集団から離れる者もいる一方で、再度被害にあわないように不良集団に接近して非行グループに取り入り非行化する者もいた。また、不良集団の中で弱い立場にあって、非行仲間から一方的に被害にあいながら、不良集団に所属し続け、非行性を強めている者もいた。不良仲間への対人依存性の強さがうかがわれる。これは、学校生活や地域生活の中での孤立感や疎外感の反映であると推測された。

また、この特徴はいじめ被害の経験についても同様にうかがわれた。これは「いじめの構造」あるいは「いじめの循環」として指摘できる。すなわち、いじめ被害にあった経験者が、更なるいじめ被害から逃れるために、いじめ加害者の側に回り、自分よりも弱い者をいじめるといった構造あるいは循環 (被害から加害への転化) が見られる。

虐待経験については、身体的虐待、心理的虐待、ネグレクトのいずれの虐待も一般の青少年よりも非行少年の方が経験値は高かった。(なお、性的虐待については、今回の研究では調査後の心理的ケア、フォローが十分行えない可能性があることと、研究倫理上の配慮から調査項目から外した。) 虐待経験については他の先行研究と同様の結果を示し、データの信頼性が検証された。

さらに、これらの被害経験時の感情特性について調査した。「恐れ」、「無力感」、「自己嫌悪」の感情については、非行少年と一般青年との間に有意差は認められなかったが、「怒り」の感情だけは非行少年の方が有意に強かった (Fig.2)。



非行少年の場合、被害体験時に感じた怒りの感情がその後の非行化傾向につながり、暴力性・攻撃性の要因になっている可能性がある。少年院・少年刑務所等の矯正施設で怒りのコントロール訓練 (処遇プログラム) を行う場合があるが、非行少年の持つ怒りの意味や根源についてより深く検討を行う必要がある。

また、今回の研究データを再分析して、非行少年群において早期非行について検討した。早期に非行に走った少年は非行性が進むことから、初発非行年齢を目標変数とし、説明変数に被害経験、被害時の感情、性格特性 (MJPI, 無気力尺度) を設定して、階層的重回帰分析を行った。その結果、虐待経験時の感情反応の強さが初発非行年齢を早めていることが検証された。すなわち、上記の結果 (Fig.2) と合わせて検討すると、非行少年は虐待経験の際に怒りの感情を強く持った非行少年ほど初発非行年齢が早く、早期から非行に走っていることが指摘できる。

総じて、非行少年は一般青年と比較して、虐待経験が多いだけでなく、犯罪被害やいじめられ経験も多く受けており、被害体験全般にわたって、生育環境上の負因を多く抱いている。特に非行少年は、被害体験時に感じた怒りの感情はその後強く抱いており、非行少年の怒りの感情が、非行化傾向につながって暴力性・攻撃性の背景になっている可能性がある。また、虐待経験時の感情反応の強さが初発非行年齢を早めている。これらのことから、今後の矯正処遇においては、被害経験によってもたらされた非行少年の怒りの感情をどのようにコントロールするかが重要な観点になるであろう。

また、今後の課題としては、今回の研究において身体的虐待と犯罪被害は「うつ屈的心理」を強め、心理的虐待、いじめ被害、犯罪被害は「無気力」を強めることが推測されたが、まだ十分なデータによる検証ができていない。とりわけ、いじめの精神的被害についての影響については不透明なところが残っている。さらに、非行少年の更生・立ち直りに際して、援助者の役割については今後の検討課題として、さらに研究を進めていく必要がある。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

- (1) 堀尾良弘(2014). 「非行少年の加害と被害に関する研究動向 - いじめに関する研究の展望 - 」(単著)『愛知県立大学教育福祉学部論集』, 査読無, 第63号, 61-66.

〔学会発表〕(計2件) / うち国際学会(計2件)

- (1) HORIO Yoshihiro(2016). 'Experiences of Victimization as a Risk Factor for Offending among Juvenile Delinquents' The 31<sup>st</sup> International Congress of Psychology (ICP2016), PACIFIC OYOKOHAMA, Japan.
- (2) HORIO Yoshihiro(2016). 'Experiences of Victimization among young offenders' The 21th Workshop on Aggression 2016, Oradea-Baile Felix, Romania.

〔図書〕(計2件)

- (1) 日下美輝子・堀尾良弘(2017). 「子どもの問題の理解と教育相談」愛知県立大学教育福祉学部(編)『小学校教育実践の基礎と展開』(共同執筆)愛知県立大学, pp.54-60, 総ページ数196.
- (2) 堀尾良弘(2016). 「被害体験と非行・犯罪」村松励・大淵憲一・藤野京子・川邊譲・岡本吉生・渡邊和美・久保貴(編)『犯罪心理学事典』原因論(分担執筆)丸善出版, pp. 54-55, 総ページ数878.

〔その他〕(計2件)

- (1) 堀尾良弘(2017). 「非行少年の被害経験 ~ 被害経験が心理特性と非行性に及ぼす影響」犯罪心理学研究会, 名古屋少年鑑別所.
- (2) 堀尾良弘(2017). 「少年非行」(指定討論)犯罪心理学方法論研究会, 近畿大学.

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

堀尾 良弘 (HORIO, Yoshihiro)  
愛知県立大学・教育福祉学部・教授  
研究者番号: 4 0 3 2 6 1 2 9